

「生涯活躍のまち」の核となる、まちに開かれた多機能型福祉施設

ジョカ

## No.1508 岩沼版 生涯活躍のまち 拠点施設 JOCA東北



市営住宅の跡地の活用になる、多機能型福祉事業所。岩沼市の「生涯活躍のまち」構想の核となる施設で、鉄骨造り2階、延床面積約 2730 m<sup>2</sup>、3980 m<sup>2</sup>の広い敷地を活かした開かれた庭には遊具も置かれた集約的規模を有する施設である。保育所、障害者就労継続支援、高齢者デイサービス、児童発達支援などの事業を運営し、地域に開かれた入浴施設、フィットネス、飲食店を併設し、こども、高齢者、障害の有無や国籍によらない「ごちゃまぜ」の場をつくる。

視察日 2021年8月18日

訪問者 山田あすか（執筆）、小篠隆生、佐藤栄治、松原茂樹、古賀誉章、荻原雅史

ご案内 河合憲太様（JOCA 東北マネージャー）：青年海外協力隊（水球のコーチ）として、インドネシアに3年間赴任した経験をもつ。

### ■事業概要（ベース資料提供：公益社団法人 青年海外協力協会 JOCA 東北）

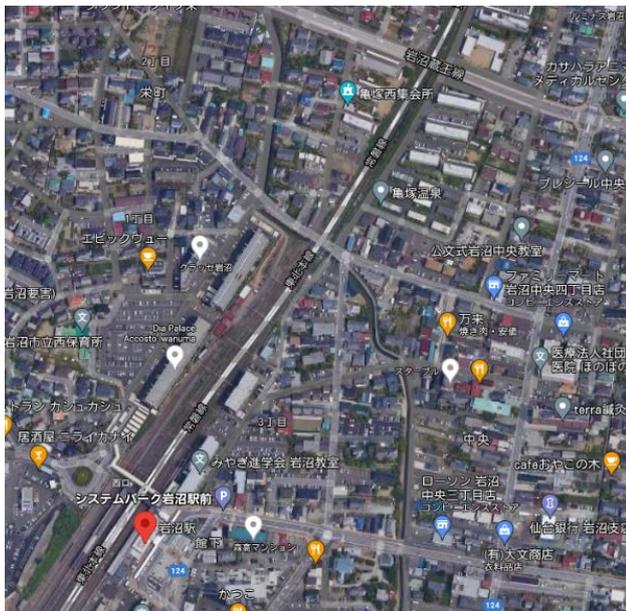
件名 市営亀塚住宅跡地 保育園併設多機能型福祉事業所建設

事業地 岩沼市中央4丁目3-1（JR東北本線岩沼駅より徒歩5分。仙台駅～岩沼駅は、20分間隔で20分。車では35分。仙台空港から車で15分）

規模 床面積：1階 1,574.37 m<sup>2</sup>、2階 1,059.08 m<sup>2</sup>

敷地 市有地の貸付による<sup>1</sup>。

年額貸付料は①建築面積にかかる貸付料＋②建築面積を除く土地面積にかかる貸付料



<sup>1</sup> 岩沼市、岩沼市市営亀塚第一住宅跡地貸付対象事業者募集要領、2017.10.13 付け、<<https://www.city.iwanuma.miyagi.jp/shisei/shisaku/senryaku/documents/zigyousyabosuyoukou.pdf>>、参照 2021.0819

- ① 建築面積にかかる貸付料(建物の使用目的により算定)：建築面積×土地評価額×4%
- ② 建物面積を除く土地面積×土地評価額×4%

開所 令和3年3月27日

事業規模 年間 約 7 億 (総売上高)

設計 株式会社五井建築研究所

施工 株式会社佐藤建設<sup>2</sup>・渡辺サービスセンター特定建設工事共同企業体<sup>3</sup>

### 実施事業および利用定員

#### □拠点施設での活動

- ・ 認可保育所 90名 <0歳～5歳>
- ・ 障害者就労支援A型 15名
- ・ 障害者就労支援B型 30名
- ・ (障害者)生活介護 20名
- ・ 高齢者通所型サービス 10名
- ・ 児童発達支援/放課後等デイサービス 10名
- ・ 相談支援事業所
- ・ 健康増進施設GOTCHA! WELLNESS ゴッチャウェルネス 会員 400名(初年度)
- ・ 市民参加の活動組織「岩沼生涯協力隊」の結成、住民ボランティアによるまちづくり
- ・ 子育て支援センター(岩沼市の委託業務として)

#### □ほか岩沼市内・外での事業(連携事業)

- ・ 障害者 共同生活援助事業所(グループホーム：介護サービス包括型) 2か所(たんぼぼ、いーぐる)
- ・ 指定管理事業運営 ※ 2015年から継続中
  - 岩沼市障害者地域就労支援センター (ひまわりホーム)
  - 岩沼市障害者地域活動支援センター (やすらぎの里)
  - 岩沼市知的障害者自立生活体験学習施設(トレーニングホームたてした)
- ・ 復興支援, コミュニティ支援, 国際協力
  - 「いわぬまひつじ村」の運営(ふるログ No.1591)
  - コミュニティ形成支援(岩沼市委託)

年額貸付料=①建築面積にかかる貸付料+②建物面積を除く土地面積にかかる貸付料

※建築面積：建物を真上から見たときの外周で求めた面積(水平投影面積)

- ① 建築面積にかかる貸付料(建物の使用目的により算定)  
 $建築面積(m^2) \times 当該地の1m^2当りの土地評価額 \times 4\%$ 
  - ・ 保育所及び保育所に付随する地域子育て支援事業で使用する面積相当分(建築面積を延床面積の比率で按分)については無償とする。
  - ・ 障害者支援及び高齢者支援で使用する面積相当分(建築面積を延床面積の比率で按分)については、土地評価額の2分の1を減額する。
- ② 建物面積を除く土地面積にかかる貸付料(土地の使用目的により算定)  
 $建物面積を除く土地面積(m^2) \times 当該地の1m^2当りの土地評価額 \times 4\%$ 
  - ・ 保育所及び保育所に付随する地域子育て支援事業で専ら使用する面積相当分(②の面積を事業毎の専用面積の比率で按分)については、無償とする。
  - ・ 障害者支援及び高齢者支援で専ら使用する面積相当分(①の面積を事業毎の専用面積の比率で按分)については、土地評価額の2分の1を減額する。

<sup>2</sup> 佐藤建設, 実績紹介, JOCA 東北, [https://www.sato-](https://www.sato-kensetsu.co.jp/works/fukushi/jocatohoku)

[kensetsu.co.jp/works/fukushi/jocatohoku](https://www.sato-kensetsu.co.jp/works/fukushi/jocatohoku) \* 地元, 岩沼市の建設会社

<sup>3</sup> 渡辺サービスセンター, JOCA 東北, <http://www.w-sc.co.jp/publics/index/75/>

- 地方創生推進交付金委託事業（岩沼市委託）
- 被災者サロン支援事業（名取市委託）
- JICAジャバ東北 青年研修（インドネシア/防災，課題別研修/災害防災 等）

**従業員数** 130名(正職員・契約職員・パート)

県内 100名， 県外移住者 30名

\*このうち30名ほどが青年海外協力隊の経験者

#### のべ人口

定住人口 約 81,400人/年〈サービス利用者、職員〉

交流人口 約 161,700人/年〈来館者・来場者〉

関係人口 約 5,000人/年〈岩沼生涯協力隊〉

**立地・周辺状況** 岩沼駅より徒歩5分。西に前面道路を挟んで線路があり，北に県営住宅，東と南は低層住宅地。岩沼市は仙台へのアクセスが良いので，仙台市内で働いている人も多い。地方都市郊外という位置づけである。なお，外国人居住者は必ずしも多くなく，人口の1%程度である。工場に勤める技能実習生が住んでいる。敷地のすぐ隣のアパートに暮らすベトナムからの技能実習生は，フィットネスの会員でもある。

## 1. JOCA と地方創生

### 1) JOCA について

青年海外協力協会(Japan Overseas Cooperative Association; JOCA)は、開発途上国の人々のために自分の持つ技術や経験を生かし活動してきた青年海外協力隊（(独)国際協力機構(JICA)が派遣する国民参加型の海外ボランティア派遣）のOB・OGらを中心とする公益社団法人である。



図1 青年海外協力隊イメージカット（河合憲太氏 JOCA 東北説明資料）

(Copyright © Japan International Cooperation Agency)



図2 JOCA イメージカット（河合憲太氏 JOCA 東北説明資料）

JOCA は、青年海外協力隊で培った精神と、経験を国内外に広く普及することを目的に据えている。例えば小中学校での JICA 青年海外協力隊での体験の講演など、国際社会や国際経験を身近に感じられるような支援などを行う。またその活動は、地域に根ざした生涯活躍のまちづくり（地方創生事業）、国際交流・国際協力から教育現場への国際理解・多文化共生の普及啓発、青年海外協力隊事業の側面支援、国際社会における協力活動に及ぶ。JOCA は長野県駒ヶ根市に置く本部事務局（2017 年に東京都千代田区半蔵門から移転）の他に、全国に 6 箇所の地方支部を持っており、JOCA 東北はその一つである。市内の旧国道沿いに事務所を構えていたが、新事業所の開設と共に現在の場所に移転した<sup>4</sup>。

## 2) JOCA と地方創生

JICA 青年海外協力隊員は、通常 2～3 年任期で開発途上国に滞在し、現地の人々と共に地域の発展や QOL 向上のための活動を行う。河合氏は、その経験を以下のように述べる。

JICA 青年海外協力隊は必ずしも長期間にわたる滞在ではなく、日本で専門の職能を活かしてバリバリ活躍している第一線の専門家による指導的なボランティアと言うより、どちらかという一般市民が、自分が持っている特技や技術で協力的なお手伝いをするというボランティア活動である。JICA 青年海外協力隊の経験があるからといって、元隊員たちが突出した国際人だというわけではないが、現地の人々と同じ場所に暮らして同じものを食べるという「現地の暮らし・コミュニティに共に参加する」「そのなかで、地域の発展に貢献する」という経験と精神を共通の土壌に持っている点が JICA 青年海外協力隊経験者の特徴と言える。

元隊員はこうした精神や経験を活かして、それぞれ国内外で活躍しているが、中央集権的・組織的な動きよりも現場でその地域の人々と一緒に考えながらその場所ならではの個別解をつくっていくような働き方をしたいという元隊員もいた<sup>5</sup>。他方、日本国内での人口偏在や人口対流のよどみ、少子高齢化、産業の空洞化などを背景とする地方の疲弊、その改善と地域の持続性向上のための「地方創生」が大きな、かつ喫緊の課題として認識されるに至っている。そこで、地方創生に関わる仕事は、青年海外協力隊の精神と経験に加えて、こ

<sup>4</sup> 一般社団法人 生涯活躍のまち推進協会、Voice, JOCA の本部移転について、2018 年 10 月 1 日、<http://shougaikatsuyaku.town/voice/181001/>、参照 2021.0818

<sup>5</sup> 2018 年 10 月 11 日に実施した雄谷氏インタビュー（ぷろログ No.1019）<https://pjcatalog.jp/archives/1299> の内容も反映している。

れからの「その場所／現場／地域性」を尊重する仕事への熱意を持つ元隊員や、まだその経験はないが共感する人々の活躍の場になるのではないかという、JOCA 会長であり社会福祉法人佛子園理事長である雄谷良成氏<sup>6</sup>を中心とする JOCA メンバーのコンセプトに基づき、JOCA による地方創生への積極的な参加が始まった。

### 3) 「ごちゃまぜ」の地域拠点

この地方創生の活動における基本的なイズムが、雄谷氏が提唱する【ごちゃまぜ】である。「老若男女、障害の有無や国籍・出身の国や地域によらず、すべての人が分け隔てなくお互いに助け合いながら暮らす」ことを表すことばで、佛子園での活動を通した“多様な人々が居合わせることで、可能なことが違うためにその差はむしろそれぞれの役割を生む。利用者を属性によって分断することが、人々の無力化、ケアする／されるの一方的な関係をつくっている”という考え方による。このことばは、インクルーシブ（包摂）とノーマライゼーションをあわせた共生の場のあり方をコンセプトualmenteに表現するキャッチフレーズとして、佛子園と JOCA で共通して使われている。

河合氏の個人的な感覚としても、「現地でのコミュニティへの参加」には特別な感覚がある。氏が経験してきたインドネシアのコミュニティは、人と人が関わる日常、漫画／実写映画の『オールウェイズ 三丁目の夕日』のような、概念としての「昭和」のようなコミュニティであった。例えば、困ったときにお隣さんに気軽に頼む、こどもが悪いことしていれば地域の大人が叱る、といった、助け合いと規範の仕組みとしてのコミュニティが開発途上国には当たり前の風景としてある、それは日本での、他者とは関わらないという都市化したまちの暮らしのなかで忘れられている関係性ではないか。他者との関係性の希薄化によって、（年齢や所属先、障がいの有無などによって）人の分断、「分け隔て」が進んでしまっているのではないかという違和感がある。こうした、良い意味でのコミュニティのあり方を日本のまちづくりや地域づくりに活かしていくべきではないかという思いから、活動の地域展開を行っている。

## 2. 「佛子園モデル」と JOCA

JOCA 東北の事業パッケージや事業コンセプトは、石川県の社会福祉法人・佛子園の各プロジェクト（集落拠点・廃寺転用の三草二木西園寺、地方都市郊外・廃校転用の B's 行善寺、地方都市・新築の SHARE 金沢、地方小都市・分散型・住宅等転用の輪島 KABULET…）を参考にしている<sup>7</sup>。佛子園と JOCA は協力協定を結んでおり、JOCA が佛子園からノウハウ

---

<sup>6</sup> 佛子園の理事長、雄谷良成氏が JICA 青年海外協力隊（1986-87、ドミニカ共和国、養護）の経験者で、JOCA でも長らく役員として会の発展に努められている縁。2021 年現在は、雄谷氏は JOCA の会長（代表理事）を務めている。

<sup>7</sup> 佛子園が地域住民からの依頼を受けて最初に手がけた「地域の拠点」である三草二木西園寺、その後改修型でなくても地域拠点を作れることを示す別スタイルのモデルとして実施された SHARE 金沢は、国交省の地方創生、日本版 CCRC、スマートウェルネス住宅

の提供を受けている。これまでに、JOCA×3（ジョカカケサン、広島県安芸太田町にあるJOCA 中国地方の事務所兼、地域の福祉拠点施設、2020年4月開業<sup>8</sup>）がJOCAによる佛子園モデルの拠点施設として開設されており、JOCA 東北は2件目である。この後、日本版CCRCに早期から着手していた鳥取県南部町<sup>9</sup>でのプロジェクト<sup>10</sup>や、JOCA 本部が置かれている駒ヶ根でのプロジェクト<sup>11</sup>も進んでいる。

地域密着型フィットネスGOTCHA! WELLNESSやブータンのそば粉を使うそば処やぶ亀、入浴施設は佛子園のB'sシリーズを母体とするフランチャイズで、材料や器具、オペレーションノウハウの提供を受けている。

佛子園では利用圏域・規模・建物もいろいろなプロジェクトを実施してきており、それらはいずれも佛子園とJOCAのパートナーである五井建築研究所の設計による。これらの経験を通して、建築空間のあり方が人の活動や人々の関係性に与える影響についての知見がストックされている。そうした研究をしながらのノウハウの蓄積を活かした、集大成の位置づけ、いわば「いいとこどり」でJOCA 東北が設計された。

### 3. 開設経緯

#### 1) 東日本大震災からの経緯

東日本大震災の後から、JOCAはJOCA 東北を中心にボランティアを全国から集め、岩沼市を拠点として復興支援を行ってきた。発災後の緊急対応期間を経て、2011年6月には、サポートセンター運営に関する協定が岩沼市とJOCAの間に締結されている。また、2011年7月には仮設住宅入居者支援業務を受託した<sup>12</sup>。

発災直後からの復興の流れの中では、当初は避難所の運営など避難生活に係る支援などが中心であった（応急対策期）。徐々に、岩沼の行政としても仮設住宅対策や新しいコミュニティづくりが中心となる復旧・復興対策期に移行し<sup>13</sup>、仮設住宅への移転支援や仮設住宅

---

事業のモデル事業として紹介・参照されている。

<sup>8</sup> ぶろログ事例 No.1591, JOCA JOCA×3（ジョカカケサン）,

<https://pjcatalog.jp/archives/2620>

<sup>9</sup> 鳥取県南部町のCCRC, <https://pjcatalog.jp/archives/142>

<sup>10</sup> ぶろログ事例 No.1593, JOCA 南部, <https://pjcatalog.jp/archives/2624>

<sup>11</sup> ぶろログ事例 No.1592, JOCA 本部事務局（駒ヶ根）,

<https://pjcatalog.jp/archives/2622>

<sup>12</sup> JOCA, IWANUMA WAY プロジェクト,

<http://www.joca.or.jp/activites/sousei/iwanuma/>, 参照 2021.08.21

<sup>13</sup> 東京都福祉保健局, フェーズごとの災害時のイメージ, 課題別地域保健医療推進プラン, 平成27・28年度 課題別地域保健医療推進プラン 市町村の災害時保健活動体制整備支援事業 ～保健師の活動を中心に～,

[https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/nisitama/tiiki/kadaibetu\\_plan/saigaiguide\\_line\\_phn.files/guideline\\_p15-22.pdf](https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/nisitama/tiiki/kadaibetu_plan/saigaiguide_line_phn.files/guideline_p15-22.pdf)

での生活支援といったお手伝いに活動内容が移り変わっていった。この時に、仮設住宅の住民となった人々の見守りやコミュニティづくりというソフトの活動経験、またそこから10年間継続している見守り支援は、JOCA 東北という新たな地域拠点をつくる礎になっている。東日本大震災の広範な被災地ではたくさんの仮設住宅群がつくられたが、その中には孤独死（亡くなった後に長く発見されない孤立死）や自死が発生した例がある。JOCAが見守り活動で入っていた仮設住宅では、それぞれのお宅を毎日訪問してちょっとした声掛けや様子見、検温などの健康チェックをするような活動を行っていたが、自死や孤立死の例はなかった。その実績の自己分析や、支援に入っていたいくつものグループに対する行政による活動評価に基づき、JOCAでの活動成果は十分に自信を持てる内容だと自負されている。

JICA 青年海外協力隊の元隊員は、福祉や介護、高齢者など要支援者の見守りについて直接その経験があるわけではないが、発展途上国で現地の人たちと同じ場所に住み、同じものを見る経験は、「場の共有」と「関係性の構築」という、一方通行ではない見守りの関係づくりに繋がっている。その、丁寧に人とかかわるといふ基盤／基本的な姿勢は、各隊員が専門とする業種や職種を問わず、共通している。

年	月	内容
2011年	6月	サポートセンター運営に関する協定を岩沼市とJOCAにて締結
2011年	7月	里の杜サポートセンター開所、仮設住民の訪問等、見守り活動開始
2014年	4月	集団移転地（玉浦西地区）のまちづくりに係る活動の支援
2015年	11月	東北大農学部より、2頭のひつじを譲り受け、試験放牧を開始。
2016年	4月	岩沼市社会福祉協議会の復興支援センタースマイルと統合、現在の名称に変更 岩沼市より指定管理で障害福祉3施設の委託を受託する
2016年	5月	牧場づくりイベント開始（以降、毎月2回開催）
2016年	4月	プレハブ仮設住宅の閉所式を迎え、全入居者の退去を見届ける 集団移転地での支援を継続
2017年	1月	ひつじ村公園づくり開始、ドックラン整備開始 岩沼市まち・ひと・しごと創生総合戦略 公募
2018年	1月	市営亀塚住宅跡地（JOCA東北） 温泉掘削（1200m掘削）
2019年	1月	市営亀塚住宅跡地（JOCA東北） 建築工事開始

図3 JOCA 東北による復興支援活動からの活動経緯（河合憲太氏提供）

## 2) 「生涯活躍のまち」事業としての連携経緯

結果的に孤独死や自死のない見守り取り組みが達成できた事例として、「生涯活躍のまち」を推進する内閣府からも、こうした見守りや関係づくりの効果は被災地での活動や復興支援に留まらない参考例となるとして、注目された。地方が抱える少子高齢化や地域関係の希薄化、要支援者へのアクセスなど多様な問題解決の基盤となり得るといふ視点と、こうし

た活動の担い手として若い人々が活躍している<sup>14</sup>、<sup>15</sup>という視点の、両方が注目されたと認識している。

震災復興の取り組みを、それに留まらない地域振興に位置づけていく考えから、岩沼市でも岩沼版生涯活躍のまちづくりを計画することとなった（第一次：2015～2019）<sup>16</sup>。その具体化に向けて、2017年3月には国の地方創生加速化交付金を活用した事業<sup>17</sup>として、次の3つの事業に整理された<sup>18</sup>。

① 岩沼版：みんなで輝く「まち・ひと・しごと」プロジェクト

- ・ 小中学生を対象とした地域人材活用教育の実践による、将来の岩沼の担い手育成
- ・ 仙台空港の立地を生かした産業・観光の情報収集や魅力発信

② IWANUMAWAY 岩沼版生涯活躍のまちプロジェクト

- ・ 他世代交流事業を通じたコミュニティ形成と高齢者や障がい者の方々をはじめとして、誰もが生涯活躍できる場の創出

③ みやぎ「県南浜街道」誘客促進事業

- ・ 岩沼市と、隣接する名取市、亶理町、山元町で構成する地場産業振興協議会を主体とした観光・旅行商品の開発、地域ブランドの担い手人材育成

このうち、②IWANUMAWAYプロジェクトが、JOCA東北に繋がるプロジェクトである。IWANUMAWAYプロジェクトは、2016年4月より、岩沼版生涯活躍のまちを目指してスタートした<sup>19</sup>。このときにはまず、仮設住宅から集団移転した住民のコミュニティ支援と、津波被害を受けて災害危険地域に指定され非可住地域となった沿岸部<sup>20</sup>での牧場・農園整備

---

<sup>14</sup> \*総務省管轄の「地域おこし協力隊」は2009年に開始、2016年には農林水産省管轄の「田舎で働き隊」（2008年開始）が地域おこし協力隊に統合。こうした、意欲ある若い人々への地方創生の担い手としての期待が高まっている時期であった。

<sup>15</sup> レファレンス協働データベース、レファレンス事例詳細(Detail of reference example), “「地域おこし協力隊」はいつから始まったのか、またどのようなことをしているのか知りたい。”, <[https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref\\_view&id=1000233043](https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000233043)>, 参照 2021.0819

<sup>16</sup> 岩沼市, 岩沼市まち・ひと・しごと創生総合戦略, 平成 27 (2015) 年 10 月 30 日付け, <<https://www.city.iwanuma.miyagi.jp/shisei/shisaku/senryaku/>>, 参照 2018.0819

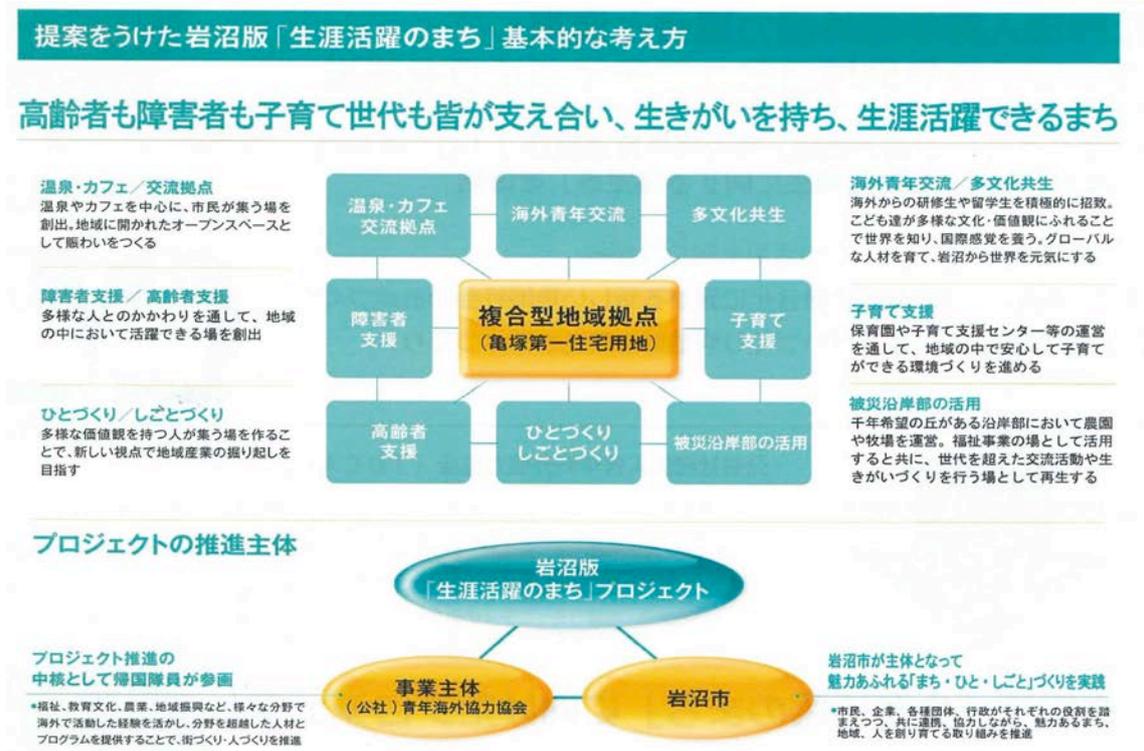
<sup>17</sup> 岩沼市, 平成 28 年第 3 回岩沼市議会定例会市政報告並びに提案理由書, 2017 年 3 月 30 日更新, <https://www.city.iwanuma.miyagi.jp/shisei/shisaku/hoshin/2016-0622-1701-44.html>, 参照 2021.0819

<sup>18</sup> 岩沼市, 地方創生の実現に向けて, <https://www.city.iwanuma.miyagi.jp/shisei/koho/documents/iwa16.5.p10-11.pdf>, 参照 2021.0819

<sup>19</sup> JOCA, IWANUMA WAY プロジェクト, <http://www.joca.or.jp/activites/sousei/iwanuma/>, 参照 2021.08.21 (再掲)

<sup>20</sup> 仙台空港南東側に広がる約 10km の沿岸部は津波災害危険地域に指定され、このエリアは、人が住まないよう、復興を象徴するメモリアル公園、震災がれきを再生利用した丘な

を行った<sup>21</sup>。このプロジェクトを足がかりとして、岩沼市の地域創生拠点施設となる事業の構想が開始された<sup>22</sup>。この事業は岩沼市直営ではなく、民間団体を事業パートナーとして指定して、市有地（市営住宅跡地）の貸し付けによって自主事業を営むスタイルで実施するフレームワークが組まれた<sup>23</sup>。当該事業の実施場所となる、貸付対象事業者の公募があり（2017年10月）、応募したJOCAが選定された。



どを含む海浜緑地として6つの公園に整備された。この公園は、震災前にあった集落の位置・名称を記憶に留めるものでもある。これらの集落に暮らしていた515世帯1784人のうち、地域に残った人々は内陸へ約3km離れた場所の「玉浦西」という新しいまちに防災集団移転した。この玉浦西地区の支援拠点「里の杜サポートセンター」に業務調整員とJOCA国内協力隊員が着任し、人々が孤立することのないコミュニティ形成支援事業を行ってきた。

・千年希望の丘, <https://sennen-kibouno-oka.com>

・JOCA, 岩沼市での活動,

<http://www.joca.or.jp/activities/disaster/tohokuearthquake/miyagi/iwanuma/>

<sup>21</sup> ぶろログ事例 No.1590, JOCA いわぬまひつじ村, <https://pjcatalog.jp/archives/2617>

<sup>22</sup> 岩沼市, IWANUMAWAY 事業部, 公益社団法人 青年海外協力協会の概要と地方創生に向けた取り組みについて, [https://www.city.iwanuma.miyagi.jp/shisei/koho/public-comment/documents/kame1\\_JOCA.pdf](https://www.city.iwanuma.miyagi.jp/shisei/koho/public-comment/documents/kame1_JOCA.pdf), 参照 2021.0819

<sup>23</sup> 岩沼市, 岩沼市市営亀塚第一住宅跡地貸付対象事業者募集要領, 2017.10.13 付け, <<https://www.city.iwanuma.miyagi.jp/shisei/shisaku/senryaku/documents/zigyousyabosuyoukou.pdf>>, 参照 2021.0819 (再掲)

図4 岩沼版「生涯活躍のまち」とその拠点施設の基本的な考え方（河合憲太氏提供）

#### 4. 地域の拠点として

以上の経緯により、JOCA 東北は、少子高齢化への対応、内閣府が推進する「生涯活躍のまち」の事業に該当する、【岩沼版生涯活躍のまち】の拠点施設という位置づけでつくられた。スタッフが共有しているコンセプトは、「ここは福祉の事業所ではあるが、地域住民の憩いの場所にも仕立てていくこと」。多くの社会福祉法人では自分の事業所の利用者だけを対象とし、その利用者らへの満足感の提供をもって事業目的を完結する場合もあるが<sup>24</sup>、JOCA 東北ではその先、福祉事業者のサービス利用者を含めて地域住民全体が活発になることを目指している。JOCA の6つの全国拠点の中でも、最大の規模の事業所で、複合している要素が多いことが特徴である。特に、佛子園モデルとしても認可保育所を併設した事例としては一番はじめて、特徴的なポイントである。



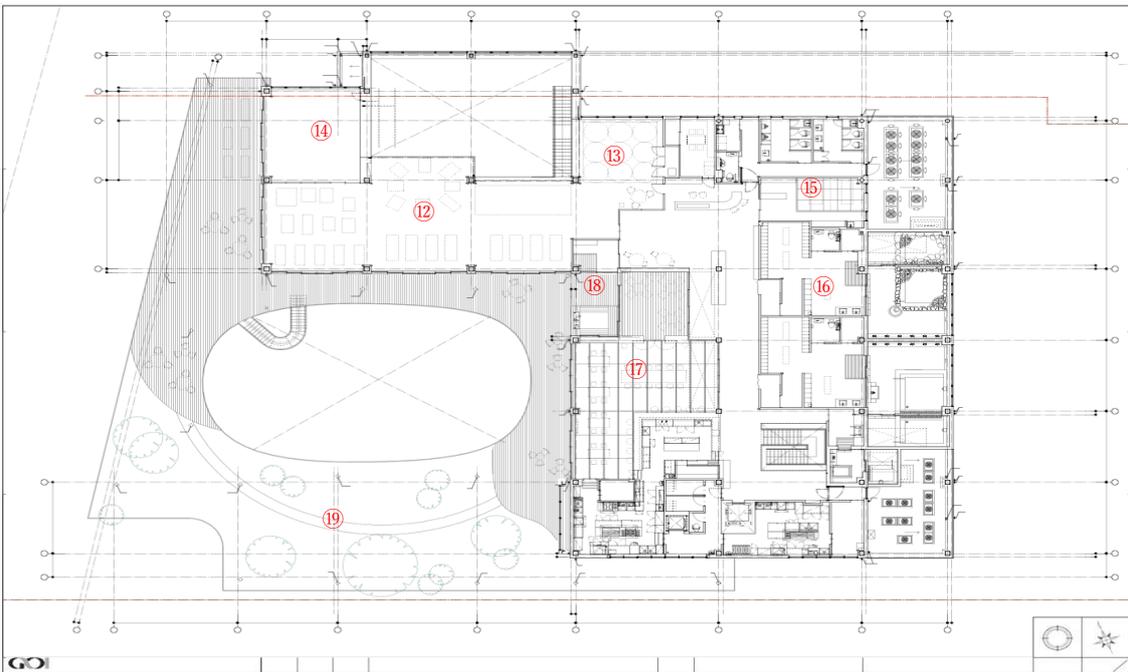
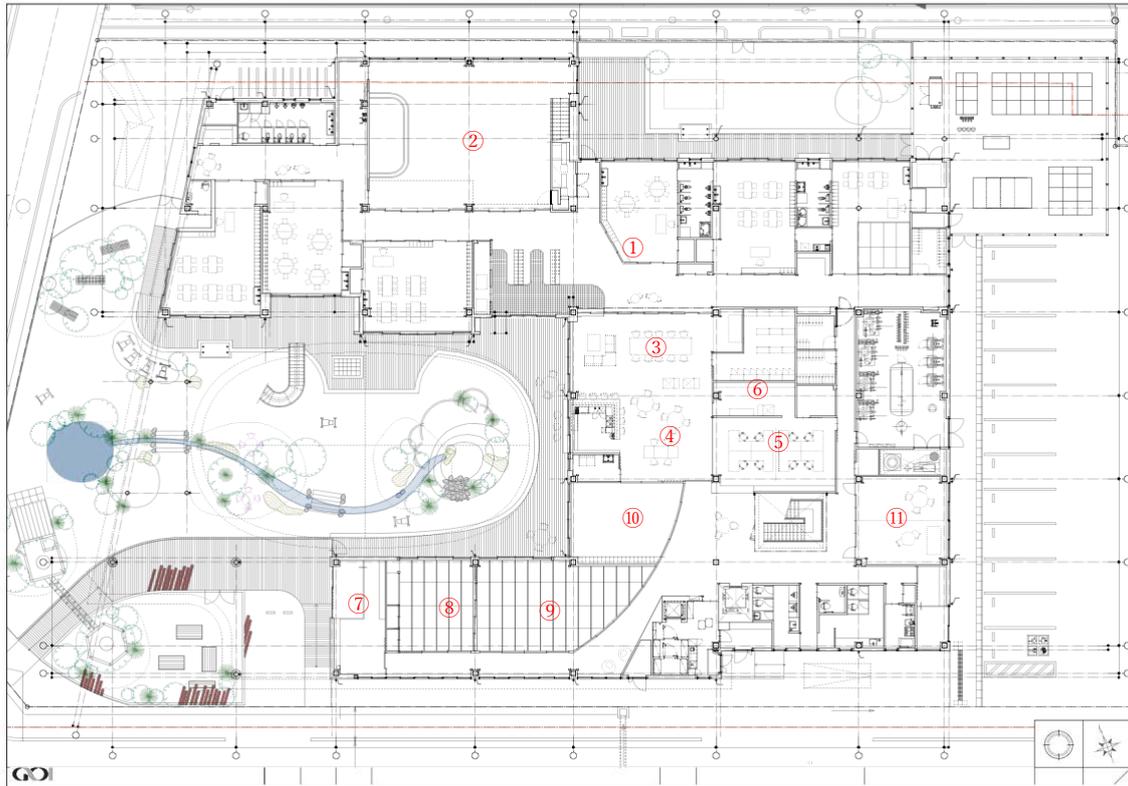
図5 保育所の園庭は、コの字型の建物全体の「中庭」の位置にある（河合憲太氏提供）

#### 5. 拠点施設について

##### 1) 全体の構成

1階にJOCA 東北のオフィス、認可保育所、子育て支援センター、児童発達支援、共生型デイサービス、2階にレストラン（そば処）、入浴施設、フィットネスが配置されている。JOCA 関連施設としては最大。全体に、動線を敢えて分離させず、各機能間にはなるべく固定的な壁を設けていない。可動間仕切りやガラス開口部の多さが特徴である。動線、音、視線の交錯により、空間と人（ハードとソフト）の両面において【ごちゃまぜ】の自然な交流が発生することが企図されている。こうした、「分け隔てない」空間は、必要な声かけや見守りを、職員や利用者が共に行う関係づくりに繋がっている。この施設を日常的に利用してもらうことで、他者同士の心理的安全性が育まれ、そのような関係が施設外の地域社会にも展開していくことを意図している。

<sup>24</sup> 地域貢献や地域連携を行う社会福祉事業所も多いが、それを主たる目的、また最終的な目的として掲げているかという趣旨。



①保育所（定員 90）、②保育所のホール、③保育所の職員室、④子育て支援、⑤JOCA 東北事務所兼相談支援事業所、⑥書庫、⑦共用玄関、⑧高齢者通所型サービス（共生型、定員 10）、⑨障害福祉生活介護（共生型、定員 20）、⑩児童発達支援・放課後等デイサービス（定員 10）、⑪会議室、⑫フィットネスのマシンゾーン、⑬フィットネスのレッドコードゾーン、⑭放課後等デイサービス、⑮ヒーリング・リラクゼーション、⑯入浴施設「亀塚温泉」（各 6 席）、⑰レストラン「そば処 やぶ亀」（50 席）・障害者就労支援 A 型（定員 15）、⑱足湯、⑲ゲルが置かれたテラス

図 6 1・2階平面図（河合憲太氏提供） \*最終プランとはテラスの形状が異なる

利用者は市内在住者が多いが、隣接する亘理町や名取市からも利用がある。利用者、職員ともに自家用車利用が多いが、駅からも歩ける距離にあり、公共交通での広域利用も可能である。また、敷地北側の県営住宅に住む高齢者の利用も多い。職員、利用者合わせて一日平均で500人くらいの人々の出入りがあり、月に1.5～1.6万人の交流人口がいることになる。地域拠点としての効果規模を交流人口で図ると、相当のインパクトがあると言える。

今までにない事業同士の連携や事業の実施場所の「開かれ」、動線が交錯する空間構成や設備・空間の共有、それによる異なるサービス利用者の混在や動線交錯などは、所管行政から見ると前例にない事例として不安や懸念の対象でもある。時間をかけて、コロナ禍の変化する状況への対応も含めて実績を積み、理念・目的や効果と対策についても説明を重ねて、ここが良き前例となるように努めていく必要があると運営者として認識している。

## 2) JOCA 東北オフィス

オープンカウンターのフリーアドレス型で作られており、職員はノートパソコンを使って仕事をする。どこで仕事をしていても良く、状況によっては2階で仕事をすることもある。個人情報等機密保持に関係して、オフィスの奥にクロードスペースとして書庫を設け、この空間構成によってなるべく開かれた執務スペースを実現している。ガラス張りの会議スペースが2階への階段奥に設けられている。

高齢者介護、障害者生活介護等では同性介護を行っているため、職員比率の関係上男性スタッフの手が必要な場合などにはこちらのスタッフが応援に行く。〇〇事業の担当なので他の事業は手伝わない、という相互独立関係にはない。



図7 1階・階段ホールから見渡す。左手に共用トイレ，手前柱の左側が共生型デイサービス，中央が児童発達支援，右奥に子育て支援，右端がオフィス



図8 オフィスはフリーアドレスで、書類はカギを掛けられる隣接の書庫室に置いている

### 3) 認可保育所 J's 保育園岩沼<sup>25</sup>

#### □保育の方針

- ・ 太陽のように明るくのびのびと、たくましく世界に羽ばたく子ども。
- ・ 豊かな感性や表現力を持ち、さまざまなことを自ら考え、表現できる子ども。

事業申請当初より、障がい児の受入を積極的に行う方針で計画。

#### □面積

敷地面積 3980.31 m<sup>2</sup>，延床面積 887.47 m<sup>2</sup>

#### □経緯

老朽化した岩沼市立亀塚保育所の閉鎖（2021年3月末）と同時に、民設民営の保育所として開園。園児と職員の半数程度が当保育所に移籍。職員は JOCA 職員として雇用されている。

#### □概要

保育所部分は園庭に面した集中玄関をヒンジとして、廊下-保育室の配置が左右反転する片廊下型保育室配置で、クールダウンスペースにもなるデン、園庭・小園庭がある。



<sup>25</sup> 岩沼市，J's 保育園岩沼，<https://www.city.iwanuma.miyagi.jp/kyoiku-sports/hoiku/documents/syoukai-js.pdf>



図9 左上から、廊下からの保育室のつながり、デン、集中玄関、1歳児保育室、フリーアドレスの職員室

玄関から斜めに隣接する位置、保育所部分の中央に2層吹き抜けのホールが置かれている。吹き抜けの2階部分はフィットネスのスペースがあり、壁一面はプロジェクターで映写をできる面に作られている。このホールは、地域交流のスペースともなるようになるべく広い面積が取られ、有事の際は避難所としても利用されることが想定されている（地域の防災避難拠点に指定されている）。



図10 吹き抜け上部でフィットネスと繋がる空間構成／空間の関係性が特徴的なホール  
園児らは階段で2階に登り、テラスを活動場所にすることもある

保育所園庭は建物全体で見ると線路側に開けた中庭にあたり、この保育所園庭に共生型デイサービスの部屋が面する構成が日常的な視線のやりとりや自然な交流のきっかけとなっている。この園庭は、規定上可能な日曜日・祝日については地域に開放している。園庭の遊具には協働で遊ぶことでダイナミックな体験をできるブランコや築山、立体遊具などス

トーリーを持たせている。ロープの橋を渡って「飛び地」に行くことができるのは3歳児以上。小さい子供たちが年長児への憧れを持つことが、成長への意欲に繋がっていく。



図11 共生型デイサービスの部屋から見る保育所園庭／中庭

開設当初、保護者からは他の機能との「近さ／仕切りのなさ」についての懸念の声も聞かれたが、なぜこのようにしているかの理由を説明し、実際に子供たちが楽しく生活している様子を日々触れる中で、いまでは理解していただいている。



図12 園庭の様子（左下写真は、河合憲太氏提供）

#### 4) 子育て支援センター J's キッズ地域子育て支援センター<sup>26</sup>

岩沼市の業務委託による。保育所の職員スペースと JOCA 東北オフィスに連続して設けられている。園庭側にミニキッチンがあり、利用者・職員が自分で持ち込むマイカップ棚が作り付けられている<sup>27</sup>。こうした仕掛けは、「ものを置く」ことによるパーソナライゼーション／「自分の居場所」化の効果に繋がると考えられ、同時に利用者が自らホストとなることで、その主体的参画の意識付けの効果も期待できる。

ここからは、テラスを介して園庭に出られる。複数のこども関連事業を利用するこどもたちの遊びの場が自然に混ざり合い、交流の機会となることが企図されている。

保育所の職員室とは稼働の間仕切りで仕切られており、将来的に異なる使い方に発展する可能性も内包している。



図 13 子育て支援スペースの様子

#### 5) 児童発達支援／放課後等デイサービス (J's 子ども LaboNet)

2階への階段のあるホールに面し、子育て支援のスペースや JOCA 東北の執務スペースとの連続性がある。ホール側はガラス戸の可動間仕切りが通常は開放され、専用の領域はあるがそこに閉じられていない(ただし他の利用者は、この場所には自由に入らない運用で、ここは利用者にとっての基地である)。園庭を囲むテラスに面し、園庭に直接出られる。

<sup>26</sup> J's キッズ地域子育て支援センター, Instagram, <https://www.instagram.com/jskids34/>

<sup>27</sup> マイカップ棚については JOCA 大阪 (ぶろログ No.0410)

<https://pjcatalog.jp/archives/688> のレポートも参照のこと。この取り組みは、JOCA と佛子園の協力による輪島 KABULET (ぶろログ No.0469) <https://pjcatalog.jp/archives/767> や、佛子園の本部施設でもある B's 行善寺 <https://pjcatalog.jp/archives/614> でも行われている。



図14 児童発達支援のスペース（左），その前のホールではチャリティイベントなども催される（右，河合憲太氏提供）

## 6) 生活介護・高齢者デイサービス

共有玄関から2階への動線に面して配置され，異なるサービスの利用者が自然に混じり合う構成となっている。ひとの間，みちの間，と名付けられた，可動間仕切りを挟んだ2つの和室として作られ，共生型で運用されている。中庭（保育所園庭）に面する側の開口部側は腰掛けの高さまで下げられ，視線が行き交う。基本的にオープンに作られているため，音などの刺激から離れたい場合の居場所や逃げ場所として，一角に段ボールの小さな小屋を設けている。

ここでは，ものをつくる，生け花，といった想像力を活かすプログラムを日替わりで行う。そのかたわらで夏休みの子供が宿題をしていたりと，この場所自体は入室の制限なく使われている。廊下に面した建具も普段から開放され，2階の入浴施設やレストランを使う人々がそうした活動を日常的に目にする。この配置や，福祉事業の利用者らの活動場所が不特定多数の利用者の動線や視線に対して開かれている空間構成は従来型の複合施設では見られない特徴的なもので，JOCA 東北の建築と場づくりの思想がよく現れた光景と言える。開かれていることへの配慮，またノーマライズされた環境という面でも注目したいのは利用者らの荷物入れで，よくある「利用者の名前が貼られた棚」ではなく，和食の料理屋や入浴施設の玄関にあるような数字つきの棚が置かれている。その福祉施設らしくない，違和感のなさはこの場所がどのようなコンセプトでつくられているかがよく反映された設えである。

この部屋の窓は中庭となっている園庭側に開かれ，そこで子供たちが遊ぶ様子がよく見える。窓台が低く抑えられており，子供たちも，中庭側から窓に張り付いて部屋の様子をうかがうなど，交流を楽しんでいる。

レストラン等の利用者と生活介護・高齢者デイサービスの利用者，こども，その保護者らといったそこを使う人々の間で，年齢や障害の有無によらずごく自然に挨拶や会話が発生し，ゆるやかな居合わせや相互の関係が生まれている。



図 15 二間続きの和室として作られている（右上写真は河合憲太氏提供）

## 7) レストラン（そば処やぶ亀）

佛子園を本部とするフランチャイズで、障害者就労支援の場でもある。サービス利用者は、キッチンやホール、それぞれの個性を伸ばしながらいろいろな仕事にチャレンジしている。佛子園の研修活動を通じて関係がある、ブータンから輸入しているそば粉を使ったそばを提供する。岩沼市内には永らく A 型就労支援事業所がなかったため、十数年ぶりに A 型就労支援事業が復活したことになる。

隣接する県営住宅の一人暮らし高齢者が食事に来るなど、地域生活や社会的交流の機会

を支える場ともなっている。1人での利用者も使いやすく、デイサービス等の利用者が厨房・ホールスタッフの見守りのもとで滞在できるカウンターがあることも来訪しやすい仕組みになっている。



図 16 レストランからは夕陽が美しく見える（河合憲太氏提供）

## 8) 入浴施設（亀塚温泉）

佛子園を本部とするフランチャイズで、障害者就労支援の場でもある。地下 1200m から汲み上げている天然温泉。岩風呂とヒノキ風呂、貸し切り風呂がある（隔日で男性／女性用を入れ替えている）。一日に平均 130 人が利用する。多くは近所の住民だが、少し遠方からの出かけ先としても訪問されており、SNS などでも投稿されている<sup>28</sup>。2階のテラスには足湯が設けられており、広く来訪者らが気軽に足浴を楽しむ他、障害者生活介護などの日課としても利用されている。

---

<sup>28</sup> 佛子園の地域プロジェクトの最初の例、集落内の廃寺改修による地域拠点である、三草二木西圓寺（ぷろログ No.0052）<https://pjcatalog.jp/archives/251> では、地域住民の日常的な利用が期待できることから地域コミュニティ形成のきっかけとして入浴施設を整備した。地域住民は無料で利用できるようにし、利用した場合には「入浴札」を裏返す。山草二木西圓寺ではこの仕組みを、多世代にとっての日常的な利用の蓋然性を高めると同時に、まだ関係がつくられていない住民の把握、関係づくりの効果測定に用いていた。当初は期待していなかったが、この入浴施設は、地域住民以外にとってはお出かけ先スポットとなり利用圏域の拡大、観光客の呼び込みに繋がった。佛子園・雄谷氏は関係人口や交流人口の拡大が地域の持続性にとって重要であるという考えであり、この“入浴施設の整備による広域利用者の獲得”の有効性の発見は、SHARE 金沢、行善寺、輪島 KABULET、JOCA×3、とその後のプロジェクトに活かされている。\*観光サイト、温泉紹介サイトなどに掲載された、三草二木西圓寺の例 → <https://onsen.nifty.com/komatsu-onsen/onsen011316/>



図17 来訪者がいつでも気軽に足浴を楽しめる足湯（左、河合憲太氏提供），入り口前の様子（右）。温泉施設の利用受付は，そば処の会計が兼ねる。

#### 9) 健康増進施設 地域密着型フィットネス GOTCHA! WELLNESS ゴッチャウェルネス

佛子園を本部とするフランチャイズで，デイサービス等を利用する障害者や子供の運動プログラムにも利用されている。ランニングマシンやベンチプレスなどのフィットネスマシンスペース，体幹トレーニングロープ「レッドコード」のスペースがある。マシンを寄せて，大人数でのヨガ教室も行われる。障害の有無によらず，みんな混ざり合っ楽しく運動する場として，日々の実績を重ねている。利用者はシニア会員を中心に口コミで増えており，一人暮らしの高齢者の友達づくりの場にもなっている。

また，スタッフの運動習慣や健康づくり，ストレス発散にも貢献している。



図18 障害の有無によらない，「ごちゃまぜ」の体操シーン。テラスの開口を開け放って広く使うことができる（河合憲太氏提供）



図 19 左から、テラスとの連続の様子、レッドコードゾーン、フィットネス入り口からの一体的な空間の様子（左端写真は河合憲太氏提供）

## 10) 岩沼生涯協力隊

「生涯協力隊」は、JOCA 会長 の雄谷良成氏の提言による<sup>29</sup>。JOCA は、JICA 青年海外協力隊の「世界を元気にした人は、日本も元気にできる」のスローガンに呼応し、途上国支援活動での経験やノウハウを、日本帰国後には日本社会に還元していこうという考えで地方創生の活動を行ってきた。

この発展系として、JICA 青年海外協力隊での活動経験の有無を問わず、地域の人々が自らまちづくりに取り組み、役割や生きがいを得て参加者もまちも元気になるための仕組みづくりとして、「岩沼生涯協力隊」が作られた<sup>30</sup>。挨拶運動や情報収集、環境美化、施設整備、見守りや福祉サービスへのボランティア参加など、それぞれができることを活かしていく。現在のメンバーは 6 歳から 89 歳までの 70 人で、家でじっとしているよりもという高齢者の参加が多い。見学時にも、障害者生活介護の活動のお手伝いをされている隊員の方複数がいた。引退した高齢者が仕事の経験を活かして貢献してくれる例もあり、例えば毎日のように保育所の園庭整備をしてくれる元植木職人の方がいる。これは、この施設の「利用者」が、「お客さん」としてだけではなく、役割を得て自己有用感や生きがいに繋がることに加えて<sup>31</sup>、施設のホスト側に回っていく仕組みでもあり、主体的な拠点づくり、まちづくり、

<sup>29</sup> 一般社団法人 生涯活躍のまち推進協議会、青年海外協力隊から生涯協力隊へ、2020.0518 付け、<http://shougaikatsuyaku.town/blog/青年海外協力隊から生涯協力隊へ/>

<sup>30</sup> 一般社団法人 生涯活躍のまち推進協議会、岩沼生涯協力隊って何ですか？、2021.0505 付け、<https://shougaikatsuyaku.town/blog/岩沼生涯協力隊って何ですか？/>

<sup>31</sup> 「今日も行くところがある」「今日も用事がある」を【キョウヨウ・キョウイク】と表現するキャッチコピーは、以前からある高齢期の生きがいづくりに関する概念で、まちづくりなどではリタイアメント世代、アクティブシニアが自ら主体的な地域の担い手となるためのキャッチコピーとしてもしばしば使われている。

「キョウヨウ・キョウイク」の初出は心理学者・多湖輝氏の『100 歳になっても脳を元気に動かす習慣術 (2011.10)』、人生の先達に教えられたことだとして紹介  
土堤内 昭雄、退職者“地域デビュー” – 高齢期の「きょうよう」と「きょういく」  
ニッセイ基礎研究所、コラム、2013.0107 付け、<https://www.nli->

まちの担い手づくりの仕組みとして貢献している様子が実感される。



図 20 元植木職人で、現在 89 歳で最高齢の隊員は、毎日のように園庭の整備に来ている  
(河合憲太氏提供)

この生涯協力隊の活動を月に 4 回以上行くと、温泉に無料で入っていただけるというインセンティブを設定している。西圓寺の地域住民の「入浴札」に代えて、ここでは拠点での活動参加者(担い手)の「活動札」板が掲示されユニフォームや記録帳と共に設置されている。これは、場のコンセプトや活動の視覚化でもある。



図 21 施設入り口に掲げられたポスター(左)、2階ホールに設けられた活動札板とユニフォーム(右)

[research.co.jp/report/detail/id=40413?site=nli](https://research.co.jp/report/detail/id=40413?site=nli)

大森彌, 「キョウイク」と「キョウヨウ」, 全国市町村会コラム, 2014.0203 付け,

<https://www.zck.or.jp/site/column-article/5023.html>

こうした人々が保育所への、動植物の提供など子供たちが「本物」に触れるきっかけを提供してくれるなど、地域で地域の大人が子供たちの成長に貢献する文化も育っている。

## 11) テラス

2階には西側に開かれた広いデッキテラスが設けられている。夕陽が美しく見える。当初計画ではテラスの中央に吹き抜け園庭が作られた、テラス自体として回遊性のある構成だったが、線路側接道面に対してコの字型の開かれた建物構成に変更されている。フィットネス、レストランから直接出ることができる。それぞれの機能からの拡張したイベント展開や子供の遊び場所、日本海倶楽部<sup>32</sup>の OEM<sup>33</sup>「協力隊ビール」を提供するビアガーデンの企画等、さまざまな活動の場所として使えるように計画されている。一角にはモンゴルのゲルが置かれている（家族宿泊など、活用方法を企画中）。この周囲を回ることができ、子供が走り回るなど「物が置かれることによる回遊性」が生まれている。



図 22 テラスの様子（河合憲太氏提供）、テラスでのイベント告知のチラシ

## 6. 利用の様子

### 1) 全体として

まだオープンして 4 か月で、しかもコロナ禍の中での運営ということもあり、模索的な段階にある。家に籠もっていてストレスが溜まっているという親子が子育て支援のスペースや園庭で遊ぶ様子、小さな子供が大人たちの見守りのもとで廊下をちょろちょろし、福祉サービス利用者と温泉等の利用者がその区別なく自然に声を交わし合う様子は、自宅以外の居場所や自由な活動場所、「いろいろな人が居る屋内型のまち」という、こうした場所の価値を端的に表すシーンである。

この場では、スタッフはあくまでも黒子で、住民が主体であるというスタンスで運営して

<sup>32</sup> 社会福祉法人 日本海倶楽部（ぶろログ No.0472）、<https://pjcatalog.jp/archives/844> では、障害者の就労支援と地域の仕事（産業）づくりとして、地ビール等の製造と販売、レストランを経営している。ここで作られた地ビールは、佛子園各施設（就労支援事業としてレストラン等を経営）で提供されている他、首都圏など全国に出荷され、農福連携や福祉を起点とした地方創生、産業創成などのブランディングにも寄与している。

<sup>33</sup> Original Equipment Manufacture（オリジナル製品製造業者）、委託者商標による受託製造

いる。利用者同士の関係や、さまざまな職員との濃淡も内容も多様な関係など、複数の福祉サービスや利用者を問わない事業を行う【ごちゃませ】の効果が現れている。



図 23 「あえて雑多」な、2階ホールの様子

## 2) ある利用者の例

短期間ではあるが、例えば市内の地域活動センターから移ってこの障害者生活介護（日中活動）のサービスを利用し始めた自閉症スペクトラムの利用者で、利用開始後の変化が著しく、自傷・他傷行為やパニックの減少など目に見えて周辺症状が落ち着いていると家族も落ち着いている例がある。

本人には時間や日課に対するこだわりがあるが、カレンダーめくり（時間の感覚支援）や畳に寝そべってリラックスの時間（触覚と空間的支援）、体操プログラムには参加せずフィットネスのランニングマシンやサーキットマシンで個別の運動（運動、発散、活動内容があること）はすでに日課となり、安定的なサイクルを構築している。そこでは、あたり前のように放課後等デイを利用する子供などとの居合わせて挨拶をしている自然な交流、すれ違えば挨拶や「これから運動だね、がんばって」など複数の職員やボランティアを含む利用者からの声かけがある（自分や自分の日課を認識して、直接間接に支援：肯定・承認・強化する人がたくさんいる）。どこかの部屋だけが活動範囲という制限はなく、行くことができる場所も多く、つまり逃げ場所や目的とできる場所、その間の移動という自由度も高い。以前利用していた施設に比べると、圧倒的に目にするものごと・できごとや関わる人々、選べる場所、それらコンテンツやそれらとの距離の選択肢が多い。マシン設備を除いて、ソフトということでは、特別なプログラムを提供しているわけでない。こうした、JOCA 東北にある場所、活動、人が多様であること、選択肢がある状況が、良い影響に繋がっているのではないかと考えている。

もちろん、この時点でハッピーエンドというわけではなく、常にステップを踏みながら社会性を涵養していくための発展の途上にあると考えている。他に、就労支援事業の利用者でも、意欲が湧きにくい性格とされていた人がいろいろな人との関わりの中で、活動に取り組みやすくなるなどの変化が見られる。

## 7. 感想と考察

JOCA 東北での、利用者らがあたり前の生活の延長として利用でき、リラックスできる時間や場所、活動への参加の選択性、目的的行為<sup>34</sup>と共に発散できる時間と場所、例にあったサーキットマシン<sup>35</sup>などこれは自分のだと思える居場所、多様な他者との多様な居合わせと

---

<sup>34</sup>そこに「やること」があるとそこに居る理由ができるため安心感、自己肯定感、滞在の安定に繋がる、ということは、例えば認知症を持つ高齢者を含む高齢者、精神障害者、知的障害者などの滞在と活動の場所づくりにおいて繰り返しその重要性が指摘されてきた。これは先述の【キョウヨウ・キョウイク】にも通じることで、**自宅以外の居場所（行くところ）と役割（すること）があることが社会的存在としての自己の根源である**ことは多くの人々に共感されるであろう。また、「居る」と「する」の関係と差異は、精神障害者のデイサービスを題材とした東畑開人氏の著書『居るのはつらいよ（2020）』のメインテーマでもある。同書では、“することがないと、居ることが難しい”ということが言葉を換えながら難度も繰り返される。逆に、“何をすることというものがなくても、ただ居ることができ”ことが重要であり、それが住まいである、と述べるのは渡辺武信氏『住まい方の実践（1997）』である。「住まう」とは個人の家に閉じる／完結する行為ではなく、地域・社会に拡がるネットワーク的な活動（行為の集合体）であり、関係性であると筆者は考える。居場所／居ること／生きがい／社会参画、これらは相互に関連する概念と理解される。

<sup>35</sup> その場面を拝見して個人的に思うところは、それは居場所というには狭く、例えば「居

その選択肢，こうした場所やふれあう人との選択肢が，良い影響に繋がっているという感覚は特徴的である。例として挙げられた障害者生活介護でのエピソード，フリーアドレスでどこでも仕事をしていい状況，事業配属先を越えた職員の連携・手助けの体制，動線の交錯などはいわゆる教科書的な動線設定やゾーニング，事業運営とは異なるものである。しかし，それら【混沌（ごちゃまぜ）】とそのなかでの【選択肢と役割】は，佛子園関連の各施設で繰り返しその意義が実感されている。筆者の個人的感覚として，その根本には，「混沌のなかでは，どのような人も，どのような居方も，否定されない」ということがあると考える。分けるから，隙間が生まれる。分けるから，居られない人や，居られない状況が生じる。



図 24 玄関ホールに置かれた、「探検」と「居場所の探索と発見」を促す看板が印象的

点」という表現の方がしっくりくる。これは子供の成長発達段階で【固有の活動場面】の成立に影響する要素，と呼んだ，場面の環境構成要素であるものやひととの関係，それらがネットワークされることで居場所になる，とした論と関連する。

山田あすか，上野淳，登張絵夢：園児の固有の活動場面の成立に影響する環境要素の分析：保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究(その2)，日本建築学会計画系論文第70巻587号，pp.49-56，2005.01

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/aija/70/587/70\\_KJ00004396890/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/aija/70/587/70_KJ00004396890/_pdf/-char/ja)

居点がちりばめられ，それらが線で繋がった（面的ではない）ネットワーク空間，活動領域が総体として居場所になっているという印象を持った。その印象は多分に，居点とそれがある場所のそれぞれが独立していない（面的領域として閉じていない），良い意味で混沌とした空間構成である影響が大きいと考える。

ジャン=ジャック・ルソー『エミール』における「子供の発見」のように、【差異】の認識は個（他とは違うそれ）の発見と異なる他者としての尊重の基盤である。その意味で、子供のための施設、障害者のための施設、高齢者のための施設、とそれぞれが必要なサービスとその提供のための場所が作られてきたことは、時代と社会とそこにいる人々の求めに対する反応として必要なステップではあった。例えば「高齢者」と一言では表せない多様なライフスタイルやライフステージ、必要なケアの種類と量、支払える居住／介護費用、地域性による可能な選択肢やニーズといった**差異の発見と認識**は、デイサービス、デイケア、ショートステイ、グループホーム、老人保健施設、特別養護老人ホーム、養護老人ホーム、有料老人ホーム等々の多様な高齢者施設をつくった。そしてそれらは、人の一生の連続性や人々の関わり合いこそがケアの本質的基盤であるというネットワーク的理解の解像度が上がるなかで、小規模多機能型居宅介護や、介護医療院といった複合的機能を持つ新たな枠組みに再編されていった。それらは既存サービスの統合的組み合わせでもあり、他の既存サービスとの差別化でもある。変化する社会のなかで、必要なケアが異なるという社会の構成員のとその状況の「差異の発見」によるサービスの創出と、作られた複数のサービスの統合再編という変化が続いている。

高齢者施設の計画史においては、個室がつくられることでむしろ共有空間に人々が滞在できるようになり相互の関係性が生まれるのだという、個の尊重による共／関係性の選択への視点がターニングポイントとなった<sup>36</sup>。戦後の個人や最小社会集団としての家族を重視した住宅と住宅地の計画はたびたび揺り戻しとしての [共 Common] の重要性の再認識が指摘される背景となっている。オープンオフィスや住み開き、シェアハウス、シェアリングエコノミー等々、[個 Private/Individual] の発見、その保障と充実は、再び [共] と [統合] に向かう。[個] の認識にあつてこそ、個の集合とそのあいだの関係性である [共] の必要性が理解される。統合先としての自宅 Home の再発見を踏まえた、在宅ケア、地域包括ケアへの移行もまた同じ軸線に位置づけられる。

世界は本質的には分けられないものであるが、人が世界を認識し理解するためには分けることが必要であり、分けたあとには再びの統合が必要となる<sup>37</sup>。人々の QOL と社会の持続性を高めるため、できることならそれに終わりが無いように、分解と再編を繰り返して社会は進化する。いま、ここではその変化の最前線—新たな「前例」をつくるための模索を見ることができる。

2021年8月21日 山田あすか（東京電機大学）

---

<sup>36</sup> 外山義『自宅でない在宅』、医学書院、2003.07

<sup>37</sup> 山田あすか：Thinking about a Care Community within the Commons through a Cotton Candy あるいは 祭りのない夏の終わりに、わたあめを一本。、2021年度日本建築学会大会研究協議会（特別調査部門）「福祉から始まる地域共生コミュニティの場の可能性」資料集、pp.166-182, 2021.09